

---

# 月の光と悪い魔女

こつぶ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

月の光と悪い魔女

### 【Nコード】

N0700L

### 【作者名】

こつぶ

### 【あらすじ】

コナンが新一に戻って一ヶ月。『宮野志保』ではなく、『灰原哀』として生きることを決めた後の話。肝試しで相手に逃げられ、途方にくれる彼女の許に現れたのは……。光哀です。Candlelight閉鎖に伴い、移行作品。

明かりもない真っ暗な暗闇の下。

その少女、灰原哀は深々と溜息をついた。

「まったく、困ったものね・・・」

一体どうしてこんなことになったのだろう。

事の始めは、帝丹小学校3年C組担任の小林教諭が計画した3年生お別れ会。

お昼過ぎ、一度下校した子供たちの再登園で始まったこの会は体育館にて始まった。

『お楽しみ』と称しているんな出し物、ゲーム……。そうやって交流を深めてから、夕方からは複数のグループに分かれてお父さんお母さんたちとのクッキングと食事会。そしてそのあとはアニメ映画を1つ見て、最後夜9時を過ぎたところに行われたのが、この今彼女が困惑する原因を作った『帝丹小肝試し大会』なのである。ルールは簡単。帝丹小学校のあまり使われなくなった旧校舎を1周し、それから校舎を飛び出し、校庭をぐるぐると回りながら、裏庭にある大きな社に向かう。白い狐の神様が眠っているといわれる社。これだけは参加するつもりはなかったのに、結局参加することになって。一緒にいるはずの相方とも逸れ、最終的にこんなところで一人途方に暮れている。

別に同じ世代の女の子のように暗闇が怖い、お化けが怖い、そう叫ぶつもりはない。

けれど、やっぱり夜の病院に次いで、夜の学校ほど不気味なものではなく。しかもいつもは滅多に使わない旧校舎。使い勝手が全然わからず、途方にくれるだけで。

相方の臆病な男の子は、腰を抜かして一人自分を置いて逃げてし

まって。まあそれも、『彼』のお母さんである工藤有紀子さんが協力したという特殊メイクを施したお化け役であるから、怯えるのも無理はないと思うけど、だからといってこんな場所に一人なんて洒落にもならない。

懐中電灯も彼が持つて逃げてしまったし。

明かりも消えて真っ暗な廊下をただ黙々と歩き続ける。ここが学校の中なのだから、決して迷う必要もない。微か後ろの方で聞こえる悲鳴や泣き声に自分だけ取り残されているわけではないということもわかつている。

・・・だけど、それでもなんとなく心細くて。

「お化け役の先生でもいいから、早く出てきてくれないかしら」  
本当のお化けなら困るけど。

そんなことをもやもや考えている自分に気づいたとき、思わず噴出した。

ああ、・・・昔はこんな風に怖がることも寂しく思ったこともなかったのに。

「平和ボケなのかもしれないわね」

組織から離れて早2年。その間にいろんなことがあって。

彼らと出会い、触れ合い、気がつけば彼らと同じ目線に立っている。彼らと共に歩いて。

・・・自分は変わっていったのかもしれない。

でも、それもまた悪くない。

ほんの1ヶ月前まで一緒に道を歩いていた、似通った境遇の彼は、もうそこにはいないけれど。

ふとそんなことを考えたとき、目の前に光が見えたような気がして、哀ははっと我に返った。

正規の出口か、はたまた別のルートか。

月の光に照らされて、窓から差し込む淡い光に彼女はほっとしてそのノブを回した。

ドアを開けば満月の光に照らされて。銀色の光に照らされて、哀はほっと息をつく。

あんなに窮屈で息ぐるしかった気持ちも、外に出ただけで開放されて。

この道はもしかしたらゴールへ続く道ではないかもしれないけれど、外へ出られたことで、道が照らされたことで、それだけで安堵感で胸がいつぱいになって、体の力が見る見るうちに抜けていった。

そこには何もない、草がぼうぼうと生えている場所だったけれど、裏道だったということを知る。

きつとこの道をぐるりと回ればゴールにたどり着けるのだろう。

そうは知っていても、何となくもう歩きたくなくて。そこにぺたりと腰を下ろしたまま、動かなかった。

・・・月は綺麗で。とても綺麗で。

夜はここ数ヶ月ずっと研究室に籠りつきりで、外に出たことがなかったから。

空を見上げたことがなかったから。

こんなに月が綺麗に輝けることを知らなくて。道を照らしてくれることも、知らなくて。

暫く見蕩れることしか、できなかった。

「・・・なんだ、此処にいたんですか」

その声に、哀ははつと我に返った。

誰の声か、声を聞けばすぐにわかる。その声はもう数年も聞いていた相手だから。思わず小さく笑みをこぼし、振り返ったが・・・。

そこにいたのは、彼女の思う、彼ではなくて。

・・・目も鼻も口もない、のっぺらぼう。

「!!???っ!」

一瞬パニックになって、言葉を無くし、後ずさる。そんな哀に目の前のお化けはくっくつと小さく笑った。

「僕ですよ僕」

マスクを脱げば、そこにいたのは先ほど思ったとおりの彼がいて「つぶ・・・らくん」

呆氣にとられたまま、哀は呆然とした表情で、してやったりの彼の顔を眺めていた。

円谷光彦。・・・この姿での、自分の幼馴染だ。

「よかった。・・・田中くん一人でゴール地点に泣きながら走って来たときは驚きましたよ。」

だって君の姿が見当たらないんですからね。・・・まったく女の子を置いて逃げるなんて、サイテーな人間ですよね」

「・・・何、その格好？」

「いや、小林先生がたまたま余っていたこののっぺらぼうのマスク貸してくれたんで、

きつと道草くってるだろう灰原さんを驚かせようと・・・。そしてたらまさかそんなに驚かれるなんて」

言葉を切って、嬉しそうに再び光彦は笑った。

「灰原さんなら逆にお化けをやっつけてしまってるかと思ってましたから。・・・意外と、女の子なんですネ」

「何、その言い方」

思わずむっとして言葉を強めれば、光彦はくすくすと冗談っぽく

笑ってそれから言った。

「嘘ですよ。．．．灰原さんが女の子だってこと、僕は知っていましたよ。．．．彼の真似をしてみただけです」

「．．．え？」

きよとん、とした顔で哀が光彦を見つめれば、彼は本当に小学生なのかと疑うような微笑を、輝きを彼女に向けて。

「知っていましたよ、ずっと前から。君の優しさも、悲しさも。涙もろいところも。実は全然強くないことも。．．．僕らをどんな風に見つめていてくれたってことも。そして、コナンくんをどんな風に想っていたってということも」

．．．僕はそこまで子供じゃないですよ。

そう言って彼は絶えず笑みをこぼしていて。彼の微笑みが月に光にとっても映えて。

その光を見ているだけで、目の前の希望を見ているだけで、自分の中にある何かがひらひらと剥がれ落ちたような、魔法が解けたようなそんな気がした。

「強がらなくていいんですよ？．．．僕の前では。彼が、僕らに別れを告げた日。君はぼつりと言いましたよね。『これでよかったのよ』って。．．．ホントは、泣きたかったんじゃないんですか？」

慈愛に満ちた、彼の声。

1ヶ月前、あの彼が解毒剤を飲む1週間前のこと。

暗い教室でその告白をしたとき、思わず呟いた言葉を、目の前の

彼に聞かれていた。

自分の迂闊さに思わず苦笑する。

「・・・もう、会ってないんですね」

「・・・そうね、『彼』とは会ってないわ」

だって、彼はもう『彼』であって、『彼』じゃない。

「会えないんですか？」

「会えないわね」

もう。

「もう魔法は解けたんだから」

「え？」

「悪い魔女にかけられた魔法は、もう解けたの。・・・彼は自由になったのよ？・・・だから、これでよかったの」

こんなことを言っても、あなたにはわからないでしょうけど。

実はこの世界は御伽噺で、彼は、魔法で変えられた仮の姿。

・・・そして、私は、悪い魔女だった。

彼を苦しめた、悪い悪い魔女。

こんなことを言っても、あなたはきっと私が冗談を言ってると思うでしょうけど。

「・・・灰原さんは魔法使いだったんですか？」

「え？」

彼は何処まで知ってるんだろう。何を知っているんだろう。

彼はそういえば他の小学生とは類を見ない頭の切れる持ち主だった



たということに、今更のように思い出して。  
もう秘密がバレても大丈夫だと言うことはわかっていたけれど。  
でも。

「そう見える?」

「そうなんですか?」

「さあ、どうかしら」

くすくすと笑って見せた表情も、なぜか次第に涙が出てきて、哀  
は思わず目頭を指で拭った。

「・・・灰原さんは悪い魔法使いなんかじゃないですよ、いい魔  
法使いです」

「そうかしら」

涙声を何とか隠そうと振舞う哀に対して、光彦はいつもと変わら  
ぬトーンで。

「そうですよ。そしてコナンくんは、いい魔法使いに変えられた  
シンデレラ、だったんですよ。

それがコナンくん自体が魔法の国からやってきた『魔法少年プリ  
ティコニー』とかv」

「・・・何それ」

思わずジト目をすれば、光彦は嬉しそうに笑った。

「よかった、いつもの灰原さんだ」

piriririri piriririri

はっとして我に返ればどこからか探偵バッチが激しく鳴っていて。  
慌てて光彦がポケットからそれを取り出した。

「こちら光彦」

「こちら光彦、じゃねーよ! 一体何やってんだよ! 灰原見つかつ

たのかよお！」

怒鳴り声は元太だ。夜だというのにいつもと変わらぬ元気な声に、哀は思わずぷつと噴出して。

「行きましょう」

光彦は手を差し出した。そして哀は手を差し出して、腰を上げた。

「ゴールはすぐそこですよ？」

「・・・なんだかずいぶん大人っぽいじゃない」

ふふ、と小さく笑えば、光彦は決意を込めた表情でこう言った。

「決めたんです。僕は、君を守るって」

「・・・え？」

「彼のようなスーパーマンにはなれないかもしれないけど・・・これからは僕が守りますから。強くなりますから。君を守るべき男になりますから。」

「女の子が怯えて泣いてるのにつべらばうで助けにくるスーパーマンじゃたかが知れてるけどね」

軽く憎まれ口を叩けば、光彦はさっと困ったような顔をした。そんな彼に対して、哀は『嘘よ』と声を上げて笑った。

（後書き）

此処までお読みいただき、ありがとうございますv

これは、2007年度『光哀企画』に投稿した作品でしたが、単に『コナンくんがいなくなったあとの灰原哀』が

書きたかったんです（笑）。で、思いついたのが肝試し。こんな感じになっちゃいました。

キャンプとかだとありきたりですからね。のっぺらぼうのみつちゃん、見てみたいものです（笑）。

一人一人お化けのメイクをしながら、脅かし方の指導とか熱烈にしているんだろうな、有希子さん（笑）。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0700/>

---

月の光と悪い魔女

2010年11月14日17時08分発行